

小学校国語科教育における「我が国の言語文化に関する事項」の意義 —「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」からの移行—

金 戸 清 高

Significance of “Items related to linguistic culture of our country” in elementary school Japanese Language education

KANETO Kiyotaka

1. はじめに

現行の小学校学習指導要領について、筆者は前稿で今回新たに加わった「情報の整理」の項目がどのように網羅され、メディア・リテラシーが小学校国語科教育で行われるようになったかについて論述した。¹本稿の主旨は小学校教育における文学教材の位置について現行の学習指導要領から確認し、新たな課題と指導法の可能性を探ることにある。そのことを始めに断っておくとともに、まずは中等教育における国語科の再編の話題から始めさせていただくことをお許しいただきたい。

2018年3月に告示された高等学校学習指導要領の改編により、国語科の科目については共通必修科目として「現代の国語」および「言語文化」を、選択科目として「論理国語」、「文学国語」、「国語表現」および「古典探究」が、それぞれ新設された。ここで注目されるのが「文学国語」が選択科目となったことである。その経緯については「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編平成30年7月」²に中央教育審議会の下記のような指摘を踏まえたものとされている。

PISA2012（平成24年実施）においては、読解力の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られたが、PISA2015（平成27年実施）においては、読解力について、国際的には引き続き平均得点が高い上位グループに位置しているものの、前回調査と比較して平均得点が有意に低下していると分析がなされている。これは、調査の方式がコンピュータ

を用いたテスト（CBT）に全面移行する中で、子供たちが、紙ではないコンピュータ上の複数の画面から情報を取り出し、考察しながら解答することに慣れておらず、戸惑いがあったものと考えられるが、そうした影響に加えて、情報化の進展に伴い、特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかとなったものと考えられる。（下線部引用者、以下同。）

この内必修科目である「現代の国語」については、「話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていない」という課題を踏まえ、「特にこうした課題が、実社会における国語による諸活動と関係が深いこと」を考慮し、「実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を育成する科目」としてその「目標及び内容の整合を図った」とされる。一方、「言語文化」については、主として「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらない」という課題を踏まえた上での設定であるという。特にこうした課題が「古典を含む我が国の言語文化への理解と関係が深いことを考慮し、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める科目」としてその「目標及び内容の整合」が図られている。

今留意したいのは「文学国語」の選択科目とともに、必修の「現代の国語」が「話すこと・聞くこと」「書くこと」を中心に展開される授業として設定さ

れていること、そして「言語文化」が第一義的に「古典の学習について」の「学習意欲」の向上が目指されていることである。これまでの国語教科書の定番であった「羅生門」や「こころ」、そして佐野幹氏によれば、³教科書が検定制になって3年後の1951年以来現在に到るまで教科書に採択されてきた「山月記」などの学習機会は過不足なく子どもたちに保障されるのか、様々な懸念が起きる。そのような中、小説5作を掲載した出版社の「現代の国語」教科書が検定を通過したという。

来年度から高校の必修教科目となる「現代の国語」の教科書に、ある教科書会社が「羅生門」などの小説を載せ、物議をかもしている。＜略＞「現代の国語」は読む教材に、評論文など「現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章」を載せることとしている。一方、「言語文化」では「古典及び近代以降の文章」とされ、小説や随筆、漢文・古文などを扱うこととされた。／ところが、今年3月にあった教科書検定で第一学習社（本社・広島市）が申請し合格した「現代の国語」の教科書4点のうち1点に、五つの小説＜略＞が載った。＜略＞文科省は同24日、教科用図書検定調査審議会を開いた。審議会は、同社の「現代の国語」が検定で合格した理由について「小説が盛り込まれることは本来想定されていないが、文学作品を掲載することが一切禁じられているわけではない」と説明。＜略＞第一学習社によると、教員への聞き取りをする中で「受験を考慮すると『言語文化』で古文・漢文は省略しにくく、小説を削らざるを得ない。であれば『現代の国語』で小説を扱いたい」との声が多数寄せられたという。＜略＞五つの小説は掲載されたまま、現在、各教育委員会による採択が進む。東京都教委によると、都立高校のうち、小説が載った同社のこの教科書を選んだ学校は53あり、全体の約24%を占め最多だった。⁴

報道によると文科省は「今後はより一層厳正な審査を行う」とされているが、現場の「『現代の国語』で小説を扱いたい」という声は見過ごすことはできない。つまり問題は新学習指導要領においては文学教材、特に近・現代の小説を学ぶ機会が不足するという現場の懸念である。OECD生徒の学習到達度調査の呼称であるPISA（Programme for International Student Assessment）は3年毎に行われているが、

上記引用の通り、2015年の結果において「読解力において」「前回調査と比較して平均得点が有意に低下している」ことが今回の学習指導要領改編に向けてのひとつの動機となっていることは、高等学校教育だけの問題にとどまらない。それ故高校より1年前に幼・小・中学校の学習指導要領が改訂されたのである。所謂論理的な思考を身につけることは、日本語という言語が本来不得意とするところだと言われる。⁵それ故日本の「国語」教育では初等教育の段階から、たとえば「文の中における主語と述語との関係に気付くこと。」（小学校〔1学年及び2学年〕〔知識及び技能〕力）、力「主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割について理解すること。」（同〔3学年及び4学年〕〔知識及び技能〕力）のような記載がされてもいるのである。⁶

とはいえ、[思考力・判断力・表現力]分野において、所謂論理的な思考や対話を重視することだけで「国語科」の目標に挙げられる「国語」を「正確」に「理解」することが達成されるわけではない。また、「適切に表現する能力」が論理的な表現のみで事足りるわけでもない。本稿ではそのような、「国語科」の学びにおいて重要な「国語の特質」である比喩、婉曲、逆説などの理解のために、文学教材のもつ意義について考察していく。

2. 「学習指導要領比較対照表」から 窺えるもの

2008年度に告示された旧要領における[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]は、1998年度告示の要領以前には「言語事項」として扱われていた。1989年では[A 表現][B 理解]の2領域を支える事項として設定されていたものが、98年で[A 話すこと・聞くこと][B 書くこと][C 読むこと]の3領域を支えるものとなり、08年では3領域をそのままに[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]となった。筆者はその経緯について、2006年に改訂された「教育基本法」第2条5に規定される「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」の条項、すなわち＜愛国心教育＞が同法に定められたこ

とから起因すること、また「伝統的な言語文化」に親しむことは物語の受容という観点から現代の小学生にとっても有益であることを指摘した。⁷

現行「国語科」小学校学習指導要領の改訂の趣旨のひとつとして、従来の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の再編成が挙げられる。「第1章総説〇2国語科の改訂の趣旨および要点 (1) 目標及び内容の構成 2内容の構成の改善」にいう。

三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ、従前、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で構成していた内容を、[知識及び技能]及び[思考力・判断力・表現力等]に構成し直した。

なお「伝統的な言語文化」の項目は直接的には「我が国の言語文化に関する事項」として[第1学年および第2学年][第3学年および第4学年][第5学年および第6学年]の各学年の[知識及び技能](3)において挙げられている。これについては前章にて引用した「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編」において、中央教育審議会での指摘が紹介されている。

中央教育審議会答申においては、「引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」とされている。⁸

「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、「書写」、「読書」に関する指導事項はこのことをふまえて新要領では「我が国の言語文化に関する事項」として整理するとともに、[第1学年及び第2学年]の新しい内容として「言葉の豊かさに関する指導事項」が追加されたという。

次に今回の再編で、どの点が新たに加わり、また削除されたかを、「比較対照表」⁹を手がかりに確認していくことにする。

まず新学習指導要領の「第2 各学年の目標及び内容」において新設された項目である。

イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊

かさ¹⁰に気付くこと。([第1学年及び第2学年] 2内容 [知識及び技能])(3)

この部分は、「解説」では次のように記されている。

言葉そのものがもつ豊かさ¹¹に気付くことを重視して新設した指導事項である。長く親しまれている言葉遊びを通して、語彙を豊かにし、言葉を用いること自体を楽しむことを示している。言語感覚を養う基盤として、第1学年及び第2学年に示している。言葉遊びとしては、いろはうたやかぞえうた、しりとりやなぞなぞ、回文や折句、早口言葉、かるたなど、昔から親しまれてきたものが考えられる。また、地域に伝わる言葉遊びに触れたり、郷土のかるたで遊んだりする活動を通して地域特有の言語文化に親しむことも考えられる。言葉の豊かさ¹²に気付くとは、言葉のリズムを楽しんだり、言葉を用いて発想を広げたり、言葉を通して人と触れ合ったりするなど、言葉のもつよさを十分に実感することである。¹⁰

因みに東京書籍版の「あたらしい国語1年上」では「ことばあそび」として「しりとり」「ことばみつけ」が、1年下では「ことばであそぼう」で「さかさまによんでも」(回文)、「だじゃれ」「わたしはだあれ」(折句)が、2年下では「おばあちゃんに聞いたよ」で「春の七草」「十二支」「小の月」(にしむくさむらい)「いろは歌」などの各項目が設けられている。旧「伝統的な言語文化」の事項にはなかったこの部分は言うまでもなく幼小の接続を念頭に置いて指導されるべき事柄である。「幼稚園教育要領」「第2章 ねらい及び内容」の「言葉 3内容の取扱い」(4)に次のように記される。

幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。

確かに「なぞなぞ」「しりとり」「回文」などは幼稚園や保育園での保育に日常的に取り上げられる遊びである。このような「言葉遊び」を小学校低学年の教材に、発展的に用いることは幼小の連続性を考える上で意義深い。

〔知識及び技能〕に関する項目で新たに加わった箇所は他に〔第5学年及び第6学年〕において以下の項目が挙げられる。

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。

この項目は〔第1学年及び第2学年〕の「(1) ア言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと」、そして〔第3学年及び第4学年〕の「(1) ア言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと」から発展した形で記されているが、旧「国語の特質に関する事項」にはなかった項目である。「相手とのつながりをつくる働き」は「伝え合う」目標達成の上で重要な項目となる。

(2) 話や文章に含まれている**情報の扱い方**に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。

情報の扱いに関する項目については「解説」(先述)の「(1) 改訂の経緯」で「様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと」と記されるように、情報教育の観点からも重視されているところでもある。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

オ 日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに関与することに気付くこと。

読書に関する項目は〔第1学年及び第2学年〕(3)エ 読書に親しみ、いろいろな本があることを知ること、〔第3学年及び第4学年〕「(3) オ 幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと」からの発展であるが今回の要領で新しく加えられた。

次に新旧対照を「伝統的な言語文化」から「わが

国の言語文化」に関する事項の異動を中心に考えてみる。まずは〔第1学年及び第2学年〕からである。

(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

旧：「**A 話すこと・聞くこと**」、「**B 書くこと**」及び「**C 読むこと**」の指導を通して、次の事項について指導する。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1)

ここで指摘しておくが、旧要領の「〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕では『A 話すこと・聞くこと』、『B 書くこと』及び『C 読むこと』の指導を通して」とあるように、同事項が先に述べられた3領域との連関の中で指導されることが謳われているが、新要領では〔知識及び技能〕が以下の「〔思考力・判断力・表現力〕に記載される3領域との連関が記載されていない。もちろんこれらの連関性は記載されなくとも明白ではあるが、1977年版の2領域1事項の時代から連綿と記載されてきた事柄が今回記載されなかったことについては疑念を残す。

(1) ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。

旧：言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。(旧 (1) イ (ア))

上記記述に変更はない。

(1) イ 音節と文字との関係、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くとともに、姿勢や口形、発声や発音に注意して話すこと。

旧：音節と文字との関係や、アクセントによる語の意味の違いなどに気付くこと。(1) イ (イ))

姿勢や口形、**声の大きさや速さ**などに注意して、はっきりした発音で話すこと。(A (1) ウ)

旧要領での記述「**声の大きさや速さ**など」「はっきりした発音で」を「**発声や発音に注意して**」と記載。内容的には大きな違いはない。

(1) ウ 長音、拗音、促音、撥音などの表記、助詞の「は」、「へ」及び「を」の使い方、句読点の打ち方、かぎ(「」)の使い方を理解して文や文章の中で使うこと。

また、平仮名及び片仮名を読み、書くとともに、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。

旧：長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと。

((1) イ (エ))

句読点の打ち方や、かぎ(「」)の使い方を理解して文章の中で使うこと。(同 (オ))

平仮名及び片仮名を読み、書くこと。また、片仮名で書く語の種類を知り、文や文章の中で使うこと。((1) ウ (ア))

この部分も内容的には新旧大きな違いはない。

(1) エ 第1学年においては、別表の学年別漢字配当表(以下「学年別漢字配当表」という。)の第1学年に配当されている漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこと。第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

旧：(イ) 第1学年においては、別表の学年別漢字配当表(以下「学年別漢字配当表」という。)の第1学年に配当されている漢字を読み、漸次書き、文や文章の中で使うこと。

(ウ) 第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

学年別漢字配当表についての記述であるが、「旧」で2項目に分けていたものが1項目にまとめられているのみで、内容的に過不足はない。

(1) オ **身近なことを表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には意味による語句のまとまりがあることに気付き、語彙を豊かにすること。**

旧：言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。((1) イ (ウ))

「意味による語句のまとまり」とはすなわち語彙を意味しているのだが、上記太字部分が新設されている。語彙に関する事項を重視した編集方針が窺え

る。

(1) カ 文の中における主語と述語との関係に気付くこと。

旧：文の中における主語と述語との関係に**注意すること**。((1) イ (カ))

(1) キ 丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて**使うとともに**、敬体で書かれた文章に慣れること。

旧：敬体で書かれた文章に慣れること。((1) イ (キ))

相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。(A (1) イ)

上記については新旧若干の表現の違いはあるが内容的にはそれほど変更はない。

(1) ク 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。

旧：語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。(C (1) ア)

以上は新旧の変更はない。

(2) 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

「情報」に関する記載は新要領で新たに加わった項目である。「情報」および「メディア・リテラシー」については前述のとおり前稿に詳述した。

(2) ア **共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること。**

旧：相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。(A (1) イ、再掲)

自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。(B (1) イ)

時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の全体を読むこと。(C (1) イ)

旧要領で記載されたものをまとめて記載した部分。内容的に大きな違いはない。

(3) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付ける

ことができるよう指導する。

旧「ア 伝統的な言語文化に関する事項」に対して上記のように丁寧な記載がなされている。

(3) ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。

旧：昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。(1) ア (ア))

旧要領「伝統的な言語文化に関する事項」からの移動。「発表し合ったりすること」を削除。

(3) イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。(新設)

先述したように、幼児教育からの連続性に関わるものでもある。現行の「幼稚園教育要領」では「言語能力の確実な育成」、「伝統や文化に関する教育の充実」、「体験活動の充実などについて教育内容の充実」が図られている。以下は「解説」からの引用である。

日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむことなどを「内容」に新たに示した。また、文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすることなどを「内容の取扱い」に新たに示した。¹¹(同「(3) 『ねらい及び内容』の改訂の要点」③領域「環境」)

以下は書写に関する事項であるが、各学年とも大きな違いはない。

(3) ウ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。(ア) 姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと。(イ) 点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。(ウ) 点画相互の接し方や交わり方、長短や方向などに注意して、文字を正しく書くこと。
旧：(2) 書写に関する次の事項について指導する。
ア 姿勢や筆記具の持ち方を正しくし、文字の形に注意しながら、丁寧に書くこと。イ 点画の長短や方向、

接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。

このように書写に関する事項に関しては(3)「我が国の言語文化に関する次の事項」として記載され上記ア、イに続きア、イ、ウの3項目に亘って記載され旧要領におけるア、イの2項目の内容が過不足なく記載されている。

(3) エ 読書に親しみ、いろいろな本があることを知ること。

旧：カ 楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと。(C (1) カより移行)

(3) エに関しては旧要領のCからの移行となっているが内容的には多くの部分が削除されている。

次に〔第3学年及び第4学年〕の異動である。

(1) ア 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。

旧：言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと。(1) イ (ア))

この部分の新旧での異動はない。

(1) イ 相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すこと。

旧：相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと。(A (1) ウより移行)

旧要領A領域からの移行であるが、新要領では「聞いたり」の記載が加わっている。

(1) ウ 漢字と仮名を用いた表記、送り仮名の付け方、改行の仕方を理解して文や文章の中で使うとともに、句読点を適切に打つこと。また、第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと。

旧：漢字と仮名を用いた表記などに関心をもつこと。

(イ 言葉の特徴やきまりに関する事項 (イ))

送り仮名に注意して書き、また、活用についての意識をもつこと。(イ (ウ))

句読点を適切に打ち、また、**段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと。**(イ(エ))
第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。(ウ 文字に関する事項(ア))

旧要領で4項目に分けて記載された部分が新要領では1項目にまとめられている。特に旧「段落の始め、会話の部分などの必要な箇所」を削除し、ただ「改行の仕方を理解して文や文章の中で使う」と記載される。

(1) エ 第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。

旧：第3学年及び第4学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。(ウ(イ))

学年別漢字配当表に関する記述は「第1学年及び第2学年」における記述と同様、変更はない。

(1) オ **様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること。**

旧：表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。(イ(オ))

旧「表現したり理解したりするために必要な語句」が「様子や甲同、気持ちや性格を表す語句」とまとめられた。また、「類別」の標記が「まとまり」と記された。語彙に関する記述が詳細化されたのは「第1学年及び第2学年」(1)オと同じ。

(1) カ **主語と述語との関係、修飾と被修飾との関係、指示する語句と接続する語句の役割、段落の役割につ**

いて理解すること。

旧：修飾と被修飾との関係など、**文の構成について初步的な理解をもつこと。**(イ(キ))

指示語や接続語が**文と文との意味のつながりに果たす役割**を理解し使うこと。(イ(ク))

文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。(B(1)イより移行)

旧要領では「第1学年及び第2学年」に見られた「主語と述語との関係」は省略されているが新要領では新たに記載されている。他旧要領において3項目に分けられて記載されたものが1項目にまとめられている。但し旧B(1)の記載は簡素化されているが、これは旧要領が「**B書くこと**」の領域に記載されたものからの移行であることに起因すると考えられる。

(1) キ **丁寧な言葉を使うとともに、敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。**

旧：**相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。**(A(1)イより移行)

文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くこと。

(B(1)エより移行)

旧要領の2項目がまとめられた。また、旧「相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て」、「適切な言葉遣いで話すこと」が簡略化して記載されている。これも「**A話すこと・聞くこと**」からの移行であることに起因すると推定される。

(1) ク **文章全体の構成**や内容の大体を意識しながら音読すること。

旧：**内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。**(C(1)アより移行)

「文章全体の構成」が付加。旧における領域Cの詳細な記述は簡略化されている。

(2) ア **考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること。**

旧：相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、**丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣**

いで話すこと。(A (1) イより移行、再掲)

話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりすること。(A (1) エより移行)

書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。(B (1) ウより移行)
内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。(C (1) アより移行、再掲)

目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。

(C (1) イより移行)

ここも複数項目を1つにまとめている。そのため旧要領の記載の多くが省略されている。但し「音読」は先の(1)クに記載される。また「事実と意見との関係」を「情報と情報との関係」に敷衍している。

(2) イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方理解し使うこと。

旧：関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。(A (1) アより移行)

目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。(C (1) エより移行)

引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。(第5学年及び第6学年のB (1) エより移行)

表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること。〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1) イ (カ) より移行)

直接の連関する項目は旧〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1) イ (カ) およびC (1) エの記載であろう。その他様々な旧要領の項目が新要領では簡略化して記載されている。

(3) ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。

旧：易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。(ア (ア))

ここでは旧要領の「ア伝統的な言語文化に関する事項」の内容が記載されているが、旧要領の「情景を思い浮かべたり」や「音読や暗唱」の項目が省略されている。

(3) イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

旧：長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。(同 (イ))

ここでは旧要領の記述が過不足なく記載されている。

(3) ウ 漢字が、へんやつくりなどから構成されていることについて理解すること。

旧：漢字のへん、つくりなどの構成についての知識をもつこと。(ウ 文字に関する事項 (ウ))

ここでは旧「知識をもつこと」から「理解すること」に変更されている。

(3) エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。

(ア) 文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。

(イ) 漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。

(ウ) 毛筆を使用して点画の書き方への理解を深め、筆圧などに注意して書くこと。

旧：書写に関する次の事項について指導する。(2)

文字の組立て方を理解し、形を整えて書くこと。((2) ア)

漢字や仮名の大きさ、配列に注意して書くこと。(同イ)

点画の種類を理解するとともに、毛筆を使用して筆圧などに注意して書くこと。(同ウ)

書写に関する項目は〔第1学年及び第2学年〕と同様殆ど変更はない。

(3) オ 幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと。

旧：目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。(C (1) カより移行)

前述したが、読書に関する項目は新では「幅広く読書に親しみ」「必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付く」など、詳述されている。

次に〔第5学年及び第6学年〕を検証していく。

- (1) ア 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと。(新設)

これも前述したが学習指導要領「伝え合う」項目とつながる重要な記述である。

- (1) イ 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。
旧：(ア) 話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと。
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1) イ (ア))

これについては新旧変更はない。

- (1) ウ 文や文章の中で漢字と仮名を適切に使い分けるとともに、送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。
旧：(ウ) 送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと。(1) イ (ウ))

新要領では「文や文章の中で漢字と仮名を適切に使い分けるとともに」が付加されている「(イ) 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。」に相応する新要領の箇所はない。

- (1) エ 第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと。
旧：第5学年及び第6学年の各学年においては、学年別漢字配当表の当該学年までに配当されている漢字を読むこと。また、当該学年の前の 学年までに配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、当該学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと ((1) ウ (ア))

これについては他の学年の同項目と同じで新旧変更はない。

- (1) オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、語句と語句との関係、語句の構成や

変化について理解し、語彙を豊かにすること。また、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うこと。

旧：語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。((1) イ (エ))
語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと。(同 (カ))

「思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使う」、「語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにする」等新しい項目が付加されている。

- (1) カ 文の中での語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること。
旧：文章の中での語句と語句との関係を理解すること。
((1) イ (オ))
文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること。(同 (キ))

旧「語句と語句との関係を理解」が「語句の係り方や語順」について言及される。また旧「構成」が「成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解」と詳述される。

- (1) キ 日常よく使われる敬語を理解し使い慣れること。
旧：日常よく使われる敬語の使い方に慣れること。((1) イ (ク))
(1) ク 比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。
旧：比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。((1) イ (ケ))

以上についての新旧変更はない。

- (2) ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること。(新設)

情報に関する記述であるが新要領では上記文言が記載されている。

- (2) イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと。

旧：考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、
収集した知識や情報を関係付けること。(A (1) アより移行)

考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。(B (1) アより移行)

旧要領の2項目を新要領ではまとめて記載されている。旧要領の項目は他領域なので記述の仕方は自ずと変わってくる。

(3) ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、**言葉の響きやリズムに親しむこと。**

旧：親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、**内容の大体を知り**、音読すること。(ア 伝統的な言語文化に関する事項 (ア))

旧「内容の大体を知り」が削除されている。ここでは古文の学習が主に中等教育機関にて学ぶ解釈中心の授業に陥らないための配慮が窺える。変わって「言葉の響きやリズムに親しむ」と記載されている。

(3) イ 古典について解説した文章を読んだり**作品の内容の大体を知ったりすることを通して**、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

旧：古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。(同 (イ))

新要領では「作品の内容の大体を知ったりすることを通して」と記載されている。これも中等教育機関での解釈中心授業となることを避けるための配慮と推定される。

(3) ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。
旧：時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと。(イ (イ))

語句の構成、変化などについての理解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと。(同 (エ) 再掲)
仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。
(ウ (イ))

共通語と方言との違いを理解し、また、**必要に応じて共通語で話すこと。**(A (1) ウより移行)

これも複数項目が1つにまとまっている。旧「語句の構成、変化などについての理解を深め」が欠如。A「話すこと・聞くこと」領域からの移行もある。特に「必要に応じて共通語で話すこと」が削除されている。

エ 書写に関する次の事項を理解し使うこと。

エ (ア) 用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。

同 (イ) 毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。

同 (ウ) 目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。

旧：(2) 書写に関する次の事項について指導する。

用紙全体との関係に注意し、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと。((2) ア)

目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと。(同イ)

毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと。(同ウ)

書写に関する項目であるが、旧要領の項目が前後しているのみで、すべて新旧変更はない。

オ **日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げること**に役立つことに気付くこと。(新設)

これについては先述したのでここでは省略する。

以上「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」から「知識及び技能」に移行した部分の異動について検証した。旧要領での記述は概ね過不足なく新要領へと移行されており、全体的に大きな変更はないが、新設された項目や旧要領より詳述された部分も少なくない。これは今回の学習指導要領改訂の経緯に触れられているように、「『生きる力』をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア『何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)』を目指しての改

編の趣旨をいかしたものであることは言うまでもない。敢えて付言するならこうした[知識・技能]は、[思考力・判断力・表現力]の項目の内容である3つの領域すなわち[A 話すこと・聞くこと][B 書くこと][C 読むこと]との緊密な連関性の中で指導申ことによって始めて結実するものであろう。

3. 国語の「正確」な「理解」と 文学教材の意義

筆者は嘗て池上嘉彦の「伝達のしくみ」¹²（を引き合いに、＜発信者＞が伝達したい内容を＜受信者＞に理解できるようにメッセージ化する際、両者の共通的文化背景等を意味する「コード」(code)を参照すること、一方＜受信者＞も発信されたメッセージを「コード」に照合しながら「伝達内容」を解説するシステムを紹介した。その際注目したのは＜発信者＞と＜受信者＞との間に共通のコードが見いだせない場合、受信者が照合する「コンテキスト」(context)である。¹³

「コンテキスト」すなわち「文脈」については「高等学校学習指導要領」¹⁴の中に見いだすことができるが、これは小学校国語科の授業でも念頭に置かれなければならない事項である。

コンテキストによるメッセージの解説という課題については、たとえば語用論という言語学の分野がある。すなわち＜発信者＞が伝えようとする内容と＜受信者＞が文脈によって理解しようとするメカニズムを研究する分野であるが、今、こどもの発達における言葉のつまずきや遅れは語用論的能力での課題が多いことが屢々指摘されてもいる。¹⁵

たとえば小学校国語科教科書では全国的に圧倒的なシェア数をもつ光村書店、東京書籍の両社が3年下で採択している「モチモチの木」¹⁶について、最近「じさま」の腹痛が仮病であるなどの新解釈が取り沙汰され、話題になっている教材でもあるが、¹⁷たとえばテキストの最終部分における「じさま」の笑いの意味については、当然現場の児童からの疑問が上がってくることが予想されるのだが、いずれの指導書にもそのことについて触れられていない。

「お前は、山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には灯がついたんだ。おまえは一人で夜道を医者様よ

びに行けるほど勇気のある子どもだったんだからな。自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらないやならねえことは、きっとやるもんだ。それを見て他人がびつくらするわけよ。ははは。」¹⁸

ちなみに『デジタル大辞泉』¹⁹では「笑い」は以下のように記されている。

わらい〔わらひ〕【笑い】

- 1 笑うこと。また、その声。えみ。「儲（もう）かりすぎて笑いがとまらない」
 - 2 「嗤い」とも書く）あざけり笑うこと。嘲笑（ちょうしょう）。「聴衆の笑いをかう」
 - 3 性に関係するもの、春画・淫具などの総称。
 - 4 石を積むとき、間にモルタルなどを詰めず、少しあけておくこと。また、そのあけた所。
- [下接語] 愛嬌（あいきょう）笑い・愛想（あいそ）笑い・薄ら笑い・薄笑い・大笑い・思い出し笑い・豪傑笑い・忍び笑い・せせら笑い・空笑い・高笑い・千葉笑い・追従（ついしょう）笑い・作り笑い・泣き笑い・苦笑い・盗み笑い・馬鹿（ばか）笑い・初笑い・独り笑い・含み笑い・福笑い・物笑い・貰（もら）い笑い

あるいは「笑い」の差異を知るため、「笑」を含む二字熟語を見ると、含笑、嬌笑、哄笑、失笑、談笑、諂笑、媚笑、憫笑、艶笑、嬉笑、苦笑、嗤笑、大笑、嘲笑、爆笑、微笑、冷笑、微苦笑などがあるが、²⁰「じさま」の笑いはいずれに当てはまるか、文脈をじっくり読み取らなければ判断に迷う。このように言葉は本来一義的なものではないのである。

ところでこうした言語におけるポリフォニー性は、文学的表現に顕著に表れたものでもあった。前田愛は「サンタグム」(統合関係)と「パラディグム」(連合関係)の両軸の2項対立を以下のように解説する。

普通、文章は線状的（リニア）な構造を持っていて、サンタグムの軸によって語が線的に連結されるのですが、その連結された系列は、それによって排除された語を潜在的に包含している。たとえば「桜が咲いた」という一つのセンテンスがあるとすれば、その「桜」は、そこに選ばれなかった「梅」であるとか、「桃」であるとか、そういう言葉を潜在的に含んでいる。あるいは「咲いた」という言葉は、「散った」とい

う言葉を潜在的に含んでいる。その潜在的に含んでいる軸が、パラダイグムの軸になる<後略>²¹

本稿「1.」の末尾に指摘したことであるが、現代のこどもたちにとって、文学教材に特徴的に見られる様々な修辭的技巧、たとえば比喩や象徴、アイロニーと逆説、そしてここまで指摘した言語の多義性などを学びとっていくことは、これまで以上に大切な課題となるに違いない。その意味で小学校国語科教育における文学的教材の学びに課せられた使命は重い。

注

- 1 金戸清高「小学校国語科教育の今日的課題 (1) -新学習指導要領にあらわれたメディア・リテラシーへの対応について-」(九州ルーテル学院大学紀要「VISIO」51号2021年9月)
- 2 「高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 国語編」(2018年7月 https://www.mext.go.jp/content/20210909-mxt_kyoiku01-100002620_02.pdf)
- 3 佐野幹『山月記』はなぜ国民教材となったのか (2013年8月大修館書店)
- 4 「教科書に小説、掲載の波紋 文学的文章除くはが…」1点は検定合格 高校新必修教科目『現代の国語』「朝日新聞」2021年9月12日)
- 5 中島文雄は西洋言語が主語を中心として展開する「命題文」であるのに対し、日本語は述語を中心として展開する「描写文」であると指摘した。それは西欧文化が古代ギリシャにおいて発達した弁証法の技術を受け継いでいるからであり、島国の閉ざされた社会で育った日本語が、意思の疎通や多弁を必要とせず、「以心伝心」が可能な社会を気付いてきたからだという。(「日本語の構造」岩波新書1987年5月)。
- 6 なお本文中で引用している「高等学校学習指導要領解説」では「国語科改訂の趣旨および要点」において更に「中央教育審議会答申」において指摘された内容として「全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題がある」ことについて触れられている。
- 7 金戸清高『『伝統的な言語文化と国語の特質』の指導法研究 I -幼小連携を視野に入れつつ-』(九州ルーテル学院大学紀要「VISIO」第39号2009年6月)
- 8 出典は2と同。「第1章総説 第2節 国語科改訂の趣旨及び要点 ○1 国語科改訂の趣旨及び要点 (3) 学習内容の改善・充実 ④我が国の言語文化に関する指導の改善・充実」による。
- 9 「小学校学習指導要領 (平成29年3月31日公示) 比較対照表」(https://www.mext.go.jp/content/1384661_4_1_1.pdf)
- 10 「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 国語編」(2017年7月 https://www.mext.go.jp/content/20210601-mxt_kyoiku01-100002607_002.pdf)
- 11 「幼稚園教育要領解説」2018年2月「(3)『ねらい及び内容』の改訂の要点」③領域「環境」
- 12 池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書1984年3月
- 13 金戸清高「こどもと言葉に関する試論」(紀要「VISIO」32号 2005年7月)
- 14 2と同。たとえば「また、文章の特徴について、『言語文化』では、文章の意味は、脈の中で形成されること」の「理解が求められている」(第1章総説第4節国語科の内容○2知識及び技能)の内容○文や文章 (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項) とある。その他「文脈」に関する記述は数十箇所に及ぶ。
- 15 樋口理恵。林部英雄「日本語における語用論的表現の発達について-普通児と自閉児の比較を通して-」(「樋口横浜国立大学紀要」37号 1987年10月)、松井智子「語用論と自閉症」(武蔵野東学園「教育センター会報」32号2017年3月)他。
- 16 斉藤隆介 文 滝平二郎 絵「モチモチの木」岩崎書店1973年11月初版、初版は、p23、p29の月が三日月になっていたが、「丑三つ時に三日月が上るのはおかしい」と指摘があり、77年の改訂版では二十日の月に変更されたという(朝日新聞2013年4月24日)。
- 17 森竹高裕「モチモチの木7 じさまの腹痛は本当のことか」(<http://sirius.la.coocan.jp/kokugo/3/motimoti07.htm>) など多数ある。内容について細かく紹介はしないが、いずれも否定的な見解はない。
- 18 東京書籍「新しい国語三下」(2020年7月)に依った。
- 19 「デジタル大辞泉」(<https://www.weblio.jp/content/笑い>)
- 20 「漢字書き順辞典」(<http://kakijun.com/kanji/kotoba/7b11.html>)
- 21 前田愛「文学テキスト入門」(1988年3月ちくまライブラリー)